

令和4（2022）年度 資源評価調査報告書（新規拡大種）

種名	ヤナギダコ	対象水域	太平洋北部
担当機関名	水産研究・教育機構 水産資源研究所 底魚資源部、青森県産業技術センター 水産総合研究所、岩手県水産技術センター、 宮城県水産技術総合センター、福島県水産海洋研究センター、茨城県水産試験場	協力機関名	

1. 調査の概要

青森県（佐井村以东）から茨城県にいたる各県が過去に遡ってまとめた主要港の月別漁業種別水揚げ量をもとに、本種の主要な漁業種類を抽出するとともに、海域別や月別の漁獲量を求め、主産地や主漁期を調べた。また、各県の漁獲量集計値の変動から、現在の資源水準および動向を判断した。なお、青森県は2007年以降、岩手県は2006年以降、宮城県および福島県は2000年以降（ただし宮城県の2020年の漁獲量はミズダコも含む値）、茨城県は1990年以降の情報を集計した。

2. 漁業の概要

本種は沖合底びき網（以下、「沖底」という）、小型底びき網（以下、「小底」という）、かごを中心に漁獲されている（図1）。主な漁業種は県によって異なり、青森県ではその他漁法、岩手県では沖底、かごおよび釣り・延縄、宮城県ではかご、福島県では沖底および小底、茨城県では沖底と小底である（図1）。また、茨城県では、1990～2005年は全体の漁獲量に対する小底の占める割合が80～96%と高かったが、2006年以降は小底の漁獲量は減少し、沖底の割合が30～61%と高い（図1）。

漁獲量は各県によって集計期間が異なり、全県のデータが揃うのは2007年以降である。また、宮城県の2020年の漁獲量はヤナギダコ・ミズダコの2種が区別されていないため、宮城県の2018～2019年および2021年における2種の漁獲量のうち、ヤナギダコが占める割合の平均値（2.9%）から2020年の漁獲量推定値を求めた。青森県から茨城県までの漁獲データがある2007～2021年の漁獲量は238～2,486トンの範囲で（表1）、福島県と茨城県の漁獲量が全体の52～96%を占めている（図2）。また、福島県の漁獲量は東日本大震災（以下、「震災」という）の影響によって2011年を境に大きく減少しており、2010年以前は1,073～2,968トンで推移していたが、2011年以降は22～353トンで推移している（表1；図1～2）。しかし、2018年以降は増加傾向となっている。

岩手県および宮城県の近年（2016～2021年）の月別漁獲量をみると岩手県では3～7月、宮城県では7～8月の漁獲量が多い傾向が認められる（図3）。

3. 生物学的特性

- (1) 分布・回遊：北海道および本州北部、サハリン、千島列島南部周辺に分布する（三橋 2003）。北海道周辺での生息水深は主に 30～600 m（三橋 2003）、福島県沿岸では 100～300 m に多く分布するとされる（吉田 2005；吉田・佐藤 2010）。夏は深場、冬は浅場と季節的な浅深移動を行う（三橋 2003）。稚ダコは夏季に水深 30 m 程度の浅場に分布し、成長すると沖合の 100 m 以深に移動する（三橋 2003）。
- (2) 年齢・成長：最大で体重 7 kg くらいまで成長するが、年齢と成長の関係や寿命についてはよく分かっていない（三橋 2003）。Jereb et al. (2014) では寿命は 3～4 年、外套長 210 mm、全長 1.2 m に達するとされる。福島県の漁獲物による推定では、春季に水揚げされる 0.1～0.4 kg サイズのものはその年の 12 月には 0.7～1.4 kg 程度まで成長し、その翌年以降は 1.4～2.5 kg 程度まで成長するとされている（吉田 2005）。ふ化直後の幼生は全長 30 mm、体重 0.6 g で、すぐに底生生活を始める（三橋 2003）。
- (3) 成熟・産卵：雌雄ともに体重 3 kg 以上で成熟し交接可能になり、秋に水深 100 m 前後の砂泥地帯で交接し、雌の体内に精子が貯えられる（三橋 2003）。繁殖活動は雌雄ともに一生に 1 回のみとされ、交接後の雄は沖合に移動して寿命を迎え、雌は交接した翌年の春に産卵すると考えられる（三橋 2003）。産卵数は 1,000 粒前後、卵は楕円形で長径約 15 mm、短径 6 mm、重さ 0.3 g、柄の長さは約 8 mm で基物に付着し、房状の卵塊は形成しない（三橋 2003）。飼育実験では水温 2～17°C でふ化までに約 10 か月を要し、その積算水温は 2,500°C・日（三橋 2003）である。
- (4) 被捕食関係：甲殻類、貝類、魚類を捕食する（三橋 2003）。

4. 資源状態

各県の漁獲量について、青森県および岩手県は2008年以降増減しながらも減少、宮城県は2018年以降大きく増加、茨城県では1990年以降増減を繰り返しているが近年は2012年以降減少となっている。一方、福島県は震災後大きく減少したものの、2017年以降は再び増加している。しかし、上述のように、震災以前の漁獲量の大半を占めていた福島県の漁獲努力量が大幅に低下しており、漁獲量から本資源の水準・動向を判断するのは困難と判断される。また、本資源の資源水準や資源動向を判断するための信頼性のある資源量指標値は現時点で得られていない。そのため、今回、本資源においては水準と動向の判断は行わなかった。

5. 資源回復などに関するコメント

本種の生物特性や資源構造には不明な点が多く、さらなる情報収集が必要である。また、東北太平洋沖のタコ類の分類は混乱していた過去があること（Gleadall 1993）、本種に似たアマダコ *Octopus hongkongensis* も同所的に出現することから（三澤ほか 2021）、漁獲物の種判別も必要と考えられる。

6. 引用文献

Gleadall, I. G (1993) Identification of the long-lingula octopuses of Japan: A status report. pp. 145-158. In: T. Okutani, R. K. O'Dor and T. Kubodera (eds.). Recent Advances in Cephalopod

Fisheries Biology. Tokai University Press, Tokyo.

Jereb, P., C. F. E. Roper, M. D. Norman and J. K. Finn (2014) Cephalopods of the world. An annotated and illustrated catalogue of cephalopod species known to date. Volume 3 Octopods and Vampire Squids. FAO, Rome. xvii+352 pp, xi pls.

三澤 遼・成松庸二・鈴木勇人・森川英祐・時岡 駿・永尾次郎・ 齊藤憲治 (2021) 東北太平洋産マダコ科の DNA バーコーディング～北部での例～. 東北底魚研究, **41**, 8-15.

三橋 正基 (2003) ヤナギダコ. In: 水島敏博・鳥澤 雅 (監修), 上田吉幸・前田圭司・嶋田宏・鷹見達也 (編), 新北のさかなたち. 北海道新聞社, 札幌. 348-351

吉田哲也 (2005) 福島県におけるヤナギダコの漁獲実態と成長に関する考察. 東北底魚研究, **25**, 76-81.

吉田哲也・佐藤美智男 (2010) 常磐海域におけるヤナギダコの漁獲実態. 福島水誌研報, **15**, 27-36.

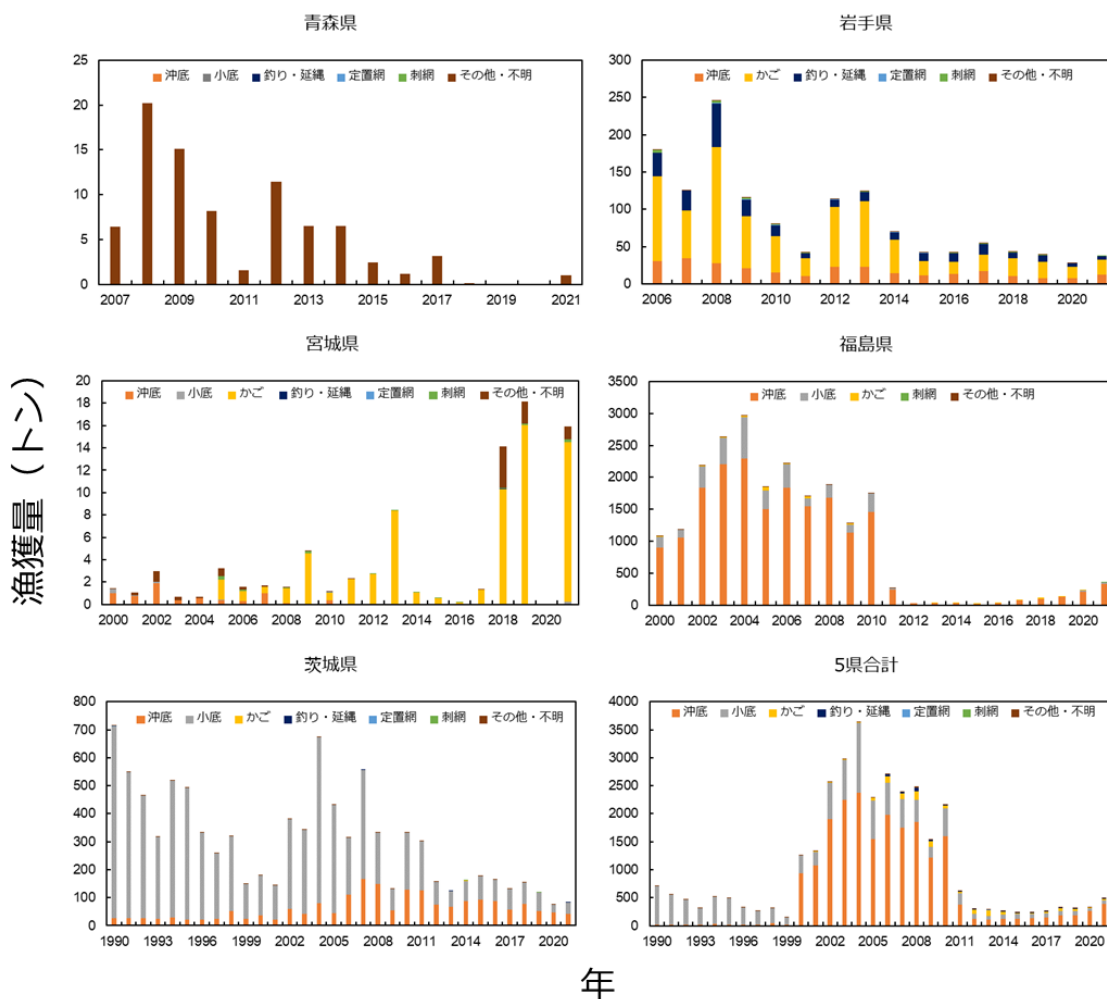


図 1. ヤナギダコの県別・漁業種別漁獲量 集計に用いた期間は県によって異なる（青森県：2007～2021年、岩手県：2006～2021年、宮城県：2000～2019年、2021年、福島県：2000～2021年、茨城県：1990～2021年）

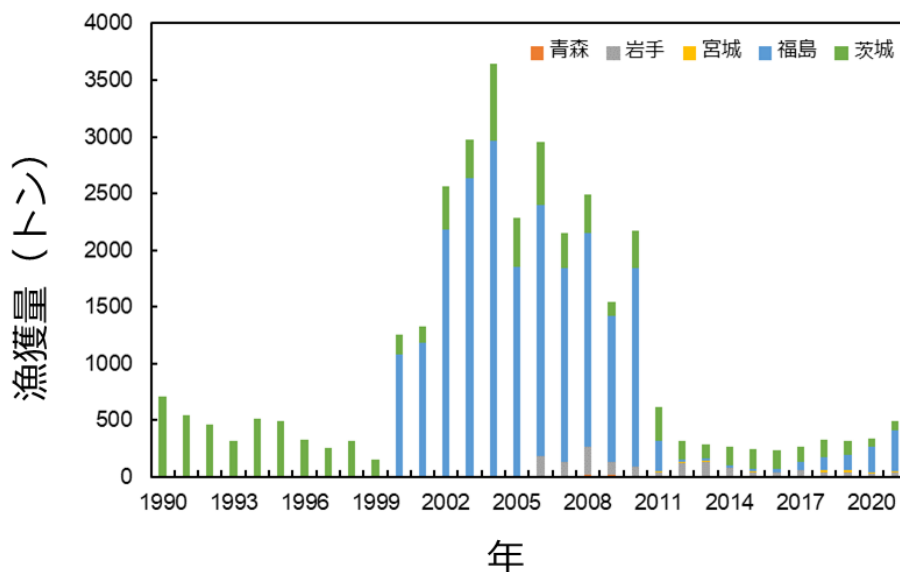


図 2. ヤナギダコの県別漁獲量 集計に用いた期間は県によって異なる（青森県：2007～2021年、岩手県：2006～2021年、宮城県：2000～2021年（2020年は推定値）、福島県：2000～2021年、茨城県：1990～2021年）

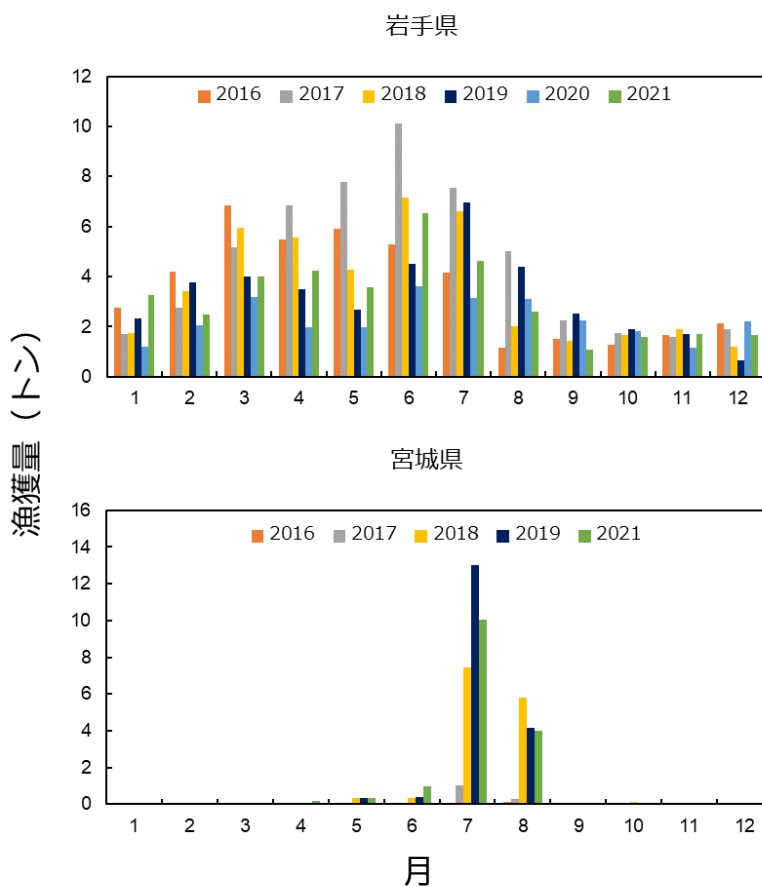


図 3. 岩手県および宮城県におけるヤナギダコの月別・年別漁獲量（2016～2021年）

表 1. ヤナギダコの県別漁獲量（トン）（宮城県の 2020 年は推定値）

年	青森	岩手	宮城	福島	茨城	合計
1990	-	-	-	-	714	714
1991	-	-	-	-	550	550
1992	-	-	-	-	465	465
1993	-	-	-	-	317	317
1994	-	-	-	-	518	518
1995	-	-	-	-	493	493
1996	-	-	-	-	331	331
1997	-	-	-	-	260	260
1998	-	-	-	-	318	318
1999	-	-	-	-	148	148
2000	-	-	1	1073	179	1254
2001	-	-	1	1181	145	1327
2002	-	-	3	2177	382	2562
2003	-	-	1	2631	343	2974
2004	-	-	1	2968	677	3645
2005	-	-	3	1852	433	2288
2006	-	180	2	2212	557	2951
2007	6	126	2	1707	314	2155
2008	20	246	2	1886	333	2486
2009	15	116	5	1281	131	1547
2010	8	80	1	1751	333	2173
2011	2	42	2	269	301	616
2012	11	114	3	29	156	313
2013	7	124	8	26	123	289
2014	7	70	1	28	161	267
2015	2	42	1	22	176	244
2016	1	42	0	30	164	238
2017	3	54	1	72	132	263
2018	0	43	14	117	153	328
2019	0	39	18	138	118	313
2020	0	28	14	226	76	343
2021	1	37	16	353	83	490